

## 「定置網漁」 150近くの漁場ひしめく

### 年間2万トンの漁獲量

氷見の海岸沿いの高台から海を見渡すと、数多くの定置網を見ることができる。大ざっぱに言うと、柄の付いたタモ網の超巨大なものを海面に置き、輪っかと柄の部分にブイを細かく並べたような形をしたもの、それが定置網だ。

定置網はその名のとおり、海の一定の場所に漁具を固定しておき、自ら網に迷い込んでくる魚やイカなどを漁獲する漁法である。大きくは魚を獲る身網(輪っかに相当する)と、身網に魚を誘導する垣網(柄に相当する)の二つの構造に分かれる。大きなものでは、身網の部分だけで幅80m以上、長さ400m以上、垣網は身網の位置から海岸まで、優に1,000mを超えるものもある。

定置網は適当な場所にただ仕掛けられているのではない。まずは、水深や潮流の関係で物理的な制約がある。つぎに魚が生業(なりわい)になるほど獲れる場所でないとは仕掛ける意味がない。隣の網との関係にも気を使う。

恐らく先人たちは、血のにじむような努力と試行錯誤を繰り返し、網を仕掛けるに足る場所を見つけ出してきたに違いない。かくして、現在ではほぼすべての定置網は一定の場所に落ち着き、それぞれ由緒のありそうな漁場名が冠されている。

制度上身網水深が27mより深いものは大型定置、それより浅いものは小型定置と分けられ、実際の網の規模もほぼこれに準ずる。延長わずか100km足らずの富山県の沿岸に、両者を合わせると150近くの漁場を数え、年間2万トン近くの漁獲量と、約60億円の産額をあげている。

しかし昨今は、漁場が岸近くにあるがゆえに、巨大化する人間活動の海に与える影響をもろに受けることが心配され、追い詰められる側に立たされている。循環型社会が望まれる現代こそ、古くから資源を絶やすことなく続けられてきた定置網漁業は大いに省みられるべきであると考えている。(内山勇)



空から見た定置網＝氷見市沖